Japanese Association for Religious Studies

の心得を示されること、などである。

四　おわりに

以上、日蓮聖人における『摩訶止観』の受容の問題について少しく考察した。このことから聖人は、一念三千の思想が明かされる『摩訶止観』を高く評価し、その思想を受容されていることが理解できる。また、そのような思想を明かされた天台大師への鑽仰と、学恩に対する報恩の念とのもと、天台大師講が修されていることが推察できる。そして聖人は、この大師講において、聖人の内包される独自の法門を教示することで、人々を法華経の信仰へと導かれたと受けとめられるのである。

日蓮と預言者類型
――佐渡流罪体験の意味するもの――

笠井正弘

昨年度の学会では、小松原法難を中心に日蓮の宗教性形成の背景となった鎌倉幕府の内部構造上の特徴を描いた。そこには鎌倉幕府執権を中心に、侍所へと権力集中をはかる得宗被官層による嫡子一括相続体制と、問注所を中心とした伝統的御家人層による諸子分割相続体制の厳しい対立が存在した。日蓮の宗教性は後者の利害に強い親和性を示しており、彼らの危機意識を鋭く反映していた。

今回の報告では、蒙古襲来という国家的危機状況下で生じた佐渡流罪事件を通して、この体験によって確立した日蓮の宗教性を考察してみたい。日蓮の宗教性を理解するときに、彼が当時荘園領民に広く信じられていた伝統的な天台系密教の正統な後継者であるという自意識、と、正しき信仰者がなぜ苦難に遭遇するのかという弁神論的な矛盾とを、如何に克服したかが問われることになる。彼の死後の日蓮教団の展開過程では、彼の密教的達人としてのイメージが強化され、「苦難の弁神論」の確立者としての面が希薄化してしまった。それが日蓮の宗教性の一側面を見えにくくしている。

「苦難の弁神論」の側面を、「使命的預言者」として把握し、その宗教的価値を発見したのは、明治以降現れたプロテスタント系キリスト者たちであった。このことは日蓮を客観的に研究することの難しさを示している。実証主義的なアプローチが、客観的研究の確かな方法である、と思われがちであるが、科学的客観性に関して、根本的に問い直す必要がある。その意味で、ゲオルク・ジンメルが「社会学の根本問題」で投げかけた実証主義的方法への批判は大きな示唆を与えてくれよう。彼の指摘どおり、実証主義は、対象それ自体が研究スタイルを規定するという、哲学的貧困の上に研究が行われている。彼は、研究者の主体的関心と対象との距離こそが研究を可能にしている、という。

内村鑑三や矢内原忠雄といった聖書主義的キリスト者たちは、彼らの主体的関心と日蓮への独自の距離から、日蓮に「預言者」を発見したのであった。それは彼らのキリスト教理解と密接な関連を持っている。以上のような問題意識のもとに、本

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

発表を通して、学術として日蓮を研究する意味を問い直してみたい。

そこで、アカデミックな水準における預言者研究としては、マックス・ヴェーバーの宗教社会学における理念型的「預言者類型」を検討する価値があろう。その分類では日蓮は古代ユダヤ教の預言者たちとともに、「使命預言者」類型に入る。それは独自の社会構造下で生ずる独自の宗教性である。それを列挙すれば

①自己の所属する世俗権力の内部構造矛盾の存在
②世俗権力自体の変質による伝統的価値の疎外の拡大
③伝統的価値の立場からの現前する世俗権力への批判者の登場
④世俗権力の滅亡に関わる致命的危機状況の発生
⑤伝統的価値への復帰を叫ぶ預言者の登場と伝統的族長たちの支援
⑥世俗権力による預言者迫害の開始
⑦怒りの人格的神性の創造と「苦難の神義論」の形成
⑧神意による現世の破壊予告と新世界再生の預言の形成

といったファクターが指摘できる。「使命的預言者」宗教性はこのファクターを共有することで存在してきた。然るに日蓮にこの因子が色濃く見られるからこそ、内村らは日蓮に預言者を発見したのであった。

長松日扇の教化活動の一研究
――曼荼羅本尊授与をめぐって――

武田悟一

一　はじめに―問題の所在

執行海秀著『日蓮宗教学史』によれば、江戸末期の教学史の特徴は在家講の勃興と在家教学の樹立であると指摘されている。すなわち真の信仰を求める在家者は、本仏釈尊の悟りの世界である法華経、それを顕揚した日蓮聖人の教えに直結して教化活動を行い、また教学研鑽も僧侶を介在せずその主体となった、というのである。そのような中において安政四年「華洛本門佛立講」を開講した在家者、長松日扇（清風）（一八一七―九〇）の教化活動に注目してみると、信仰的共同体で結ばれた信徒が信行の礼拝対象、信仰のあかしとしての曼荼羅本尊を、日扇みずから染筆し信徒へ授与している行為が見逃せない。現存する日扇授与の本尊は『佛立開導日扇聖人御本尊集』があり、八八一点収録している。では、在家者である日扇は何故に本尊を染筆し信徒に授与できたのであろうか。また、これらの行為は八品門流の本山末寺に対して許された行為なのか、以下少しく検討を加えたい。

二　日扇の教化活動に対する本山からの圧力

日扇の本尊授与行為に注目すると、京都本能寺尼崎本興寺の両本山は日扇の教化活動に圧力を与えている。すなわち安政六

NII-Electronic Library Service